

# 概要報告

実施期日	8月1日(金)
部会名	中学校 特別支援教育部会

テーマ 『 キャリア教育への取り組み 』 ～社会参加に向けた土台作り～

## 提案概要

### ○実践に向けての課題意識

支援学級生徒の共通課題は、卒業後の具体的なイメージがもてず、学習に課題意識をもって取り組めないことである。個別指導計画やキャリア教育への取組を通して、保護者・生徒双方に卒業後の生活に見通しをもたせ、生徒には将来の希望をもって自分の生活に主体的に取り組む人になってもらいたいと願っている。ここでのキャリア教育は、将来の社会参加のための土台作りと位置づけ、以下の視点をもって実施した。

### ○実践の概要

- ① 主体的に身の回りのことをしようとする姿勢や意欲の育成（自立の視点から）
- ② 課題に取り組む力を高める取組（働く視点から）
- ③ 自分も周囲も大切にする取組（社会性を高める視点から）
- ④ 将来に目を向ける活動への取組（卒業後の生活に見通しをもつという視点から）

### ○成果と課題

- ・役割分担を決め仕事をさせることにより、責任感や自己肯定感を高めることができた。
- ・報告・連絡・相談を徹底し、一定の作業時間に取り組む態度を育成することができた。
- ・専門家によるアドバイスを頂き、保護者の安心や安定性、生徒のもつ課題に対する理解を得ることができた。
- ・自立のための基本的な生活習慣の確立やコミュニケーション能力の向上が、キャリア教育に不可欠な課題である。

## 質疑概要

### ○ 性教育の外部講師について、教えてほしい。

⇒\* 障がい児・子どもを対象とした性教育プログラムなどの活動をされている方をお願いした。保護者と生徒それぞれを対象に講話をしていただいた。(有料)

\*生徒の様子も様々なので、外部講師は頼みにくいこともある。人とのかかわりからプライベートゾーン、男の子と女の子の体、人との付き合い方。携帯電話の使い方や余暇の使い方もやると良い。児童相談所でトラブル事例の話があった。予防として話しておくことは大切。

### ○ 新しいことをやらせる時に、生徒の反発がある。どのようにしているか教えてほしい。

⇒\*生徒には分担して作業をさせている。「好きな仕事だけするのは趣味、好きな仕事も嫌いな仕事もするのが仕事」とであると伝えている。褒めたり拍手をしたりして作業をさせている。

## 研究協議概要

### ○研究協議の柱

1. 社会参加に向けた土台作りについて、どのような取組をしているか。
2. 自分の生活や課題に主体的に取り組ませるための工夫。  
(4～5名の7グループに分かれて、研究協議の柱について討議、発表をおこなった。)

### 研究協議の柱1

○社会が求める人材は、挨拶ができることや、伝えたいことを伝えられるコミュニケーション能力。コミュニケーション能力向上のキーマンを知る教師との関係づくりが大切である。

○農作業を通じて、作物を育てる、収穫して食べる等の一連の学習の中で達成感を味わわせる。

- 職場体験を重視している。通常の学級と一緒におこなっている。個々の能力が違うので、一斉に取り組むのは難しい。普段の生活から「仕事をするようになったら…」という声かけは必要であるが、かけすぎるとプレッシャーとなる。お金の価値や働く意味を伝えること、さらに保護者の理解、サポートも大切。
- サポート校に小・中の保護者、教員対象に説明会をおこなってもらっている。また、特別支援学校の先生に生徒の様子を見てもらい、保護者面談もしてもらっている。
- 保護者に情報をどのように伝えるか、横のつながりをもたせたい。ボーダーの子達は何でも出来そうだが、簡単なことにつまずいてしまう。
- 社会福祉協議会、児童相談所、特別支援学校との繋がりを意図的につくっていく。
- 職場体験、職場見学、進路学習その他、日常生活でおこなっている教育活動すべてが社会参加に向けた土台作りにつながっている。
- 自分のことを自分で行う、集団生活が営めることを目標に、掃除、洗い物、話し方の指導をしている。宿泊学習では、自炊を大切にしたり、入浴や着替え、普段見られないところをみたりして、後の学習に結び付けている。
- 課題の必然性が大切である。籐細工を販売して対価を得て、行事の時の材料費とすることで、お金をもらう意識を高めている。四季の行事を大切にすることで、社会と繋がる。
- 作業を進めるといふより、「できました」等の報告を徹底している。失敗したときに黙っているのではなく、相談や報告をすることを大事にしている。「わからない」と言っても良いことを教えている。そのためには、安心できる場、雰囲気づくりが大切である。

## 研究協議の柱2

- 交流に行く生徒は学習したいと思っている。意欲が高いので主体的にやる。競争心より動機付けをさせる。時間を意識させるために、日課表を明確にして時間の感覚を育てている。
- 刺し子の作業に繰り返し取り組むことで上達し、作品もきれいに出来るようになった。そうすると褒められ、達成感にもつながり、意欲も出て主体的に取り組もうとする姿が見られるようになった。
- 掃除の取組で、ゲーム感覚で取り組めるような目標（レベル表）を作り、シールなどを貼って繰り返すと、自分から取り組むようになった。
- 1クラスに1～3年生まで一緒に生活し学習しているので、後輩が出来ると先輩としての自覚も芽生えて行動できるようになる。それをモデルにして、後輩も成長できる。集団で役割を決めることで、自分の仕事や、やるべきことがわかると、自分から取り組みやすい。

## まとめ概要

研究協議の柱1については、学校の数だけ実践がある。研究協議の柱2については、毎日模索しながらの実践であるが、その中で、自分のこと、課題に向かっていく力を付けさせていきたい。

挨拶は、社会に向けて自分を開くことになる。通常の学級の生徒は口の大きな花瓶であり、情報がたくさん入り、発信することができる。しかし、特別支援級の生徒は、口の小さな花瓶であり、入る情報の量も少なく発信することも少ない。だからこそ、しっかりとした情報を正確に入れていくことが大切である。

『キャリア教育への取り組み』は、特別支援教育の全ての教育活動において基盤となる。生徒の社会自立、将来をどう見ているか。そして、そのことを保護者に自信をもって、目的や目標を説明できることが大切である。

今日の発表をはじめ、先生方の取組が社会参加に向けての1つ1つの実践である。家庭・外部講師・教育資源・児童相談所などとの連携が実践されていることを確認することができた。生徒にとっては、先生たちがいるから学校に来られる。「ありがとう」と伝えたり、褒めたりしてもらえることが次の活動への力となる。自信をもって活動してほしい。